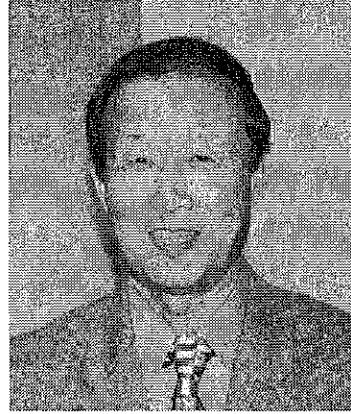


保護者の役割(高校編)



女子栄養大学
染谷 忠彦 常任理事
学園政策、運営担当

連載 第3回 「保護者」

高校生といえはちょうど思春期の真っ只中。子育ての最大の難所ともいえる年齢だ。何を言っても反発する。

しかし、最後は身内、保護者の意見を聞きたくなる。子どもには、保護者でありオーナーでもある立場から、考え方を必ず伝えるようにしたいものだ。

ただし、子どもにも意見を言う場合、子どもの考え方をちゃんと聞き、ま

ず認めてあげることが大切。その上で「こんな考え方もあるんじゃない?」と保護者からの参考意見を伝えることが大事。自分の意見を認めてくれたということから、子どもが聞く耳を持つのである。

「子どもと」シミュレーションがありませんとする保護者もいる。しかし、その子が生まれて一番長く付き合っているのは保護者なのだ。聞かないふりをして聞いているものもある。子どもの最大のアドバイザーは保護者、とりわけ母親なのである。

高校生が進路を考える際、「最後に誰に相談しますか」とのアンケートで、2年前ぐらいから先生と保護者が同じぐらいになり、現在では保護者、

特に母親が一番である。保護者の役割は重大で、進路が間違ったとしても他人のせいにする訳にはいかないのである。

このように保護者の責任は重大だから、子どもと一緒に進路を考える必要がある。子どもが考える進路先を親の時代の感覚で考えるのではなく、子どもの立場になり、その進路の現実を見る必要があるのだ。進学ならば学ぶ分野から学校選びまで、保護者の目で確かめてアドバイスをする。保護者と子どもの見た理解の仕方は違つてが多い。

子どもの進路なのだから最後は子ども自身に決めさせることである。保護者はあくまで良きアドバイザーであるのを忘れずに!